

## 旅順・大連の引揚げから今日まで

神奈川県 牛島 五郎

### 一 終戦前の我が家

祖父母の代から大連に住んでいた父は、大連商業学校から東京の大学に進み、当時、官吏と言われた地方公務員であった。勤務地は関東州庁を中心に各地の民政署を転勤したので、我々兄弟五人の生地、学校は大連、金州、旅順にまたがっており、それぞれ心の故郷は異なっている。

私は昭和八（一九三三）年二月二日に金州で生まれ、小学校一年生まで八年間を金州で育った。わずか一歳四カ月で母を亡くしたのは金州で、その後、継母を失ったとばかり思って過ごしていた。父の転勤で大連光明台小学校に転校し、小学校三年生のときに太平洋戦争に突入した。十二月八日は、軍艦マーチと共に放送された宣戦布告を聞き、その興奮冷めやらぬ中、雪道の中を中央公園から大連神社まで行進して武運長久を祈願した。その

後、西広場の映画館で戦意高揚のニュース映画とエンタツ・アチャコの喜劇映画を観て、徒歩で帰ったのを憶えている。

緒戦時の日本軍の戦火は華々しく、「軍艦マーチ」と「海ゆかば」で始まる大本営発表のニュースに聞き耳を立て、胸躍らせた少年時代であった。翌年二月にマレー半島を制圧し、シンガポールを昭南島と改名し、これからはゴムが自由に供給されるということで、このころ貴重品であったゴム底の運動靴が配給された。やがて、四月十八日、東京への敵機襲来のニュースが流れ、アツツ島玉砕が報じられて戦局に転機が訪れた。それでもまだ日本は勝つと教えられており、大人も子供も防空壕掘りに精をだしていた。

小学校も六年生になると、手旗信号とモールス信号の習得に励み、教育勅語と歴代天皇の名前を暗記させられ、知らぬ間に戦時体制に組み込まれていった。

終戦を迎えたのは旅順である。小学校四年生から旅順に住み、昭和十九年、祖母はここで亡くなった。祖母が亡くなる前は八人家族で、毎年正月には正装して写真館に行き、記念写真を撮るのが恒例になっていた。当時の生活

は、父の給料以外に祖母の小遣いとして大連・南山麓の一八〇平方メートル、総二階建ての貸家から得られる家賃収入があり、子供心にも不自由の無い生活をしていた。

祖母は当時、東京にいた娘（私には叔母となる）を訪ねるときは、往復ともまだ珍しかった飛行機を使っていた。父は旅順民政署で経済課長の職にあり、かつ中国語通訳もしており、中国人の面倒見が良く、管轄下にあった水師営、老虎尾半島、灯台近くの農漁村を訪ねて交流を重ねる日々を平穩に送っていた。休日には私もよく連れられて農漁村に遊びに行き、行く先々で山ほどのご馳走がでて歓待された。今から思えば、これら農村の人々は大地主だったのであろう。果樹園も父の管轄下にあつたので、季節になると洋梨、サクランボ、リンゴなど、木から直接もぎ取って、食べ盛りの子供の胃袋を満たしてくれた。リンゴなどは、毎年、木箱に籾殻を入れたのいっぴい大玉の国光が絶えることなく補充され、子供でも自由に食べる事ができた。父が大連水産学校で中国語の教師をしてきた関係で、ときには遠洋航海から帰った学生たちが、活

きの良い鮒ぶりや鮪まぐろを持って遊びに来ることもあつた。

このような平和な我が家にも、戦争の厳しさが日を追つて迫ってきた。まず次兄は昭和十九年四月に旅順中学校から陸士に進み、長兄は九月に旅順高校から東大に入學した。年が明けると、東京に出たばかりの長兄にも召集令状が来て、二月に旅順に呼び戻されソ満国境近くの満洲里に入營した。当時は、まだ日本が戦争に負けることなどだれの念頭にも無く、五月の東京大空襲で焼け出された叔母が、従姉三人、従弟二人の子供を連れて一家六人で旅順に疎開して来た。それでも、このころはまだ父も健在で、衣食住に不自由を感じることはなかった。

ところが、四十八歳になつたばかりの父にも終戦直前の六月に召集令状が来てチチハル近郊へ配属となり、残されたのは旅順医専に入学したばかりの兄を頭に家族四人と叔母一家の六人、二家族、合計十人所帯になつた。この時期、まさかと思うことが続き、旅順に敵前上陸があるので準備怠り無きようとお触れがでて、学校では竹槍訓練、匍匐訓練などをしていた。

旅順は軍港で海軍基地があったが、空襲らしい空襲は一度も経験したことはなかった。ただ警戒警報は何度かあって、灯火管制もあった。B29が飛来したとき、海軍基地から発射される高射砲は、飛行雲を引きながら空高く飛ぶ目標には届かず、空しく空砲となって空中で炸裂していた。四月に中学校一年に進学してからは、教員の手不足もあって授業らしい授業はなく、来る日も来る日も校庭の片隅に大きな貯水槽を掘る作業が続き、校庭にサツマイモを作ったり、道路に出て肥料の馬糞取りなどをしていた。

## 二 終戦直後の旅順

終戦を迎えたのは旧市街・旅順民政署際の官舎であった。照りつける太陽の下、炎熱下にかしこまって玉音放送を聞き、やっと戦争が終わったらしいということで、みんなわけも分からずキョトンとした表情で顔を見合わせた。今後どうなるかなど、だれも皆自分からない状況であった。しかし、翌日八月十六日になると、どこに隠れていたのか二十人ぐらいの八路軍兵士がボロボロの服を着て靴も履かず帽子もかぶらずに、炎天下の官舎前の路上を隊列行

進しているのを見て、否が応でも戦争が終わったことを思い知らされた。

戦争が終わって一週間は、無政府状態の中を、いつものように軍歌こそ歌わなかったが、隊列を組んで毎日新市街にある中学校に登校していた。最初にソ連軍兵士を見たのは、八月二十二日であった。二十二日早朝に登校途上、旧市街の朝鮮銀行玄関前に、マンドリンと言われる自働小銃を持ったソ連軍兵士が立っていた。初めて見る兵士は、猿のような真つ赤な顔をしているというのが第一印象で、赤軍というのは顔が赤いところから名付けられたのかと思っただけである。この日からソ連駐留軍に統治された生活が始まり、日本人の生活は一変した。

中学校はすぐ閉校となり、旧市街の食堂の二階を借りて形ばかりの寺子屋式授業が始まった。これも、九月になるとすぐに取り止めとなってしまった。それから間もなく、自宅近くの蓮池のそばにあった海軍予備学校の学生たちがいなくなると、どこから聞きつけたのか数千人の中国人群衆が、予備学校の倉庫目がけて一斉に行動を起し暴動となった。予備学校の倉庫には、米、缶詰、酒類な

どの食料品、毛布、被服、軍靴などが山積みされており、それを目掛けてすさまじい群衆の群れが襲いかかって奪い合い、恐ろしい思いで息を潜めていなければならなかった。

やがてソ連軍兵士が鎮圧にかかり、自動小銃で空砲を乱射し始めたので、一部の中国人が我が家の庭にまで逃げ込んで来て、危機感さえ憶えた。それからの毎日は、囚人兵と言われるタチの悪い兵士たちが、我が物顔に日本人家屋に土足で上がり込み、家中を荒らし回り盗みをした。

我が家は父が民政署の管理職で比較的豊かであったせいか、中国人の手引きがあったのか分らないが、近所に比べてタチの悪い兵士たちに土足で家屋に侵入される被害を頻繁に受けた。家には、東京から疎開して来た妙齡の従姉たち三人がいたので、家屋侵入のソ連兵からの難を免れるため、棟続きの押入の中の隣家との隔壁をぶち抜いて、逃げ道を作らねばならなかった。残された兄は、肋膜炎と診断され療養が必要となったこともあり、重要な家財道具や貴重品を持って、学台の丘の上にあった民政署・署長官舎に泊まり込みで居候させてもらった。署長官舎

には通訳がいて、司令部配属の歩哨二人が二十四時間体制で監視していたので、安全であった。歩哨の兵士と雑談していると、彼らはアメリカは敵国と教育されているらしく、戦争は避けられないということをまくし立て、息巻いていたのが印象に残っている。

進駐して来たソ連軍は物資が乏しかったのか、将校といえども時計を持たず、珍しがって「チャスイダワイ（時計よこせ）」と言って片端から略奪するのが目立った。中には腕いっぱい腕時計をはめて得意満面、見せびらかす兵士もいた。棟続きの官舎に駐屯していたソ連兵は、水の乏しい国から来たと思わせる生活をしてきた。彼らは朝起きて顔を洗うとき、口をゆすいだ水を両手に受けて、その水で顔を洗っていた。個人的には親しみの持てる将校や兵士もいた。バケツで紅茶を沸かして勧めてくれたり、たまには日常食の硬い酸っぱい黒パンを我々子供たちにくれることもあった。一方、日常見られたソ連軍の隊列行進では、高らかに合唱しながら行進するのがよく見られた。それも、日本軍のような戦意高揚の軍歌ではなく、戦後日本でもお馴染みになった「カチュウシヤ」「モスクワの夜は更け

て」のようなロシア民謡を二部合唱、三部合唱で唄うのを得意としていた。体格が良く、声量豊かな一人が先導で高らかに一節唄うと、そのあとを全員が唱和するということの繰り返しで、それはそれは見事なものであった。彼らは、歌を唄うのが先天的にうまい芸術的センスのあるスラブ民族で、横に手を振って歩調を取る独特の歩き方が、歌とマッチして際だった印象を持ったものである。今の中国解放軍兵士や北朝鮮軍のメーデーパレードなどをテレビで見ていると、ソ連の軍事訓練の痕跡が、手を横に振って歩調を取る独特の歩き方に残っている。

やがて十月に入ると、軍港旅順は日本人総立ち退きの命令がでて、特殊技術者以外は強制的に大連に引っ越しさせられた。

護衛されていた署長は、通訳と共にそのままシベリアに送られ、家族は二度と再会することはなかったそうである。五十歳前後の老人にとっては、食糧事情の悪いシベリアの厳寒と強制労働に耐えるのはかなり難しく、多くの人たちが犠牲になった。

### 三 終戦後の大連

旅順から大連への移動は、我々一家と叔母一家、合計十人がトラックと汽車に分乗してばらばらであった。私はトラックに乗ったが、途中で検問があって、身の危険を感じながらやっとの思いで大連の父の友人宅に着き、ほっと胸をなでおろした。

大連での居候先は若狭町という中央公園近くの住宅街で、比較的静かな環境であった。生活が落ち着くと、すぐ大連一中に入學手続きをとってもらい、そこから中央公園の中を通って通學した。

父の友人一家五人に、我々居候の十人を加えた三大家族が同居する中、曲がりなりにも平穩に暮らしていた十一月のある日、千千ハル近郊に入営していたはずの父が、満鉄機関士の制服制帽に身を固めて、突然我々の前に姿を現した。話によると、得意な中国語を操り、あるときは中国人に化け、あるときは日本人になりすまして満鉄機関士となり、機関車の釜焚きをしながら逃げ帰ったとのことである。父にこのような才覚があるとは、夢にも思わなかった。驚きである。毎年、冬になると肺炎を患っていた父の健康状態を考えると、シベリアに抑留されていれば、

間違ひなく再び日本の地を踏むことはできなかったろうと思ふ。このとき、生きるということは人から与えられるものではなく、自分自身が目標に向かって行動を起こし、責任を持つことだということを学んだ。

十二月になり厳寒期になると、蓄えも残り少なくなり、収入の見込みも無い生活に追い込まれていった。二十万人の大連の日本人は、日本からの援助の手も届かず棄民状態になっていて、帰国できる見込みも無く収入も無い中で、生きる手立てを自ら必死に見出さなければならぬ。私たち家族は、取り敢えず今日の糧を稼ぐため、豆腐を売り、夏にはアイスキャンデー売りなど、何でもやってみた。早朝の暗い時刻に起き出して、仕入れるものを仕入れなければ、その日は商売は上がったのである。特に、豆腐売りは零下十度以下の冬の寒い最中に、冷たい水の中に手を入れて豆腐を取り出すのがつらかった。このころ、早朝の仕入れの帰りに中央公園を通りかかったとき、道路側の草むらに日本人の若い女性が裸にされ死体になって横たわっているのを見て、届ける先も分からず怖くなっ

て逃げ帰ったこともあった。当時の大連は、ソ連軍が統治し中共軍が治安に当たっていたが、ほとんど無政府状態であった。

平成七(一九九五)年に、大連で日本語教師をしていたとき読んだ大学の必須科目「中国革命史」に次の記述があった。これを見ると、国民党政府は大連・旅順には関与していなかったことが分かる。

港町・大連には、少しでも早く日本に帰りたという淡い希望を持って満州奥地から逃げて来た開拓団の人たち、学業半ばで市井に放り出された学生が、乞食のような格好をして集結していた。このような状況下、寒い曇り空の中、私が店を出している所に、若者が貧しい身なりで人懐かしげに近寄って来て、毎日朝食にはバナナを食べているとか、戦前の豊かな生活を夢のように語りだし、明日必ず支払うからパンを二つ食べさせてほしいと言うのに私は逆らえず、その人にパンを二つ渡した。ところが、そのままドロンを決め込まれた。食うや食わずの生活状況の中、あとで騙されたと思って大変悔しい思いをした。しかし、今考えるとどこのだれとも分からない日本の若者に、少し

は良いことをしたのかなと思えるようになった、

東京から疎開して来た叔母は生活力旺盛で、金州まで汽車で出掛けてソ連軍将校の家庭を訪問し、注文を取って来て従姉と一緒に奥さんのセーターを編んだり、着ることが無くなった振袖や着物からドレスを作ったりして大変喜ばれた。これで、たまには米のご飯が食べられ、一時ではあったが一息ついたこともあった。これも原資となる着物があるまでのことで、原資が無くなればそれまでのことである。

やがて、戦後二回目の冬を迎えるころ、日本人と中国人の居住区が面積対人口比で不公平というのを口実に日本人居住区の全員が立ち退きを命じられ、お寺の本堂や大きな施設などに移転収容させられた。我々の落ち着いた先は、春日町先の丘の上にあった稲荷神社の本堂であった。だだっ広い本堂に、シーツを針金で吊しただけの仕切の中、数家族が雑居する避難民生活である。暖房も無く、七輪に豆炭を起こして炊事し、暖を取った。今で言うブライバシーなどという言葉は無く、今日を生きるのが精一杯という環境であった。悲惨なことに、寒い本堂の共同トイレ

で赤ちゃんを産んだ女性もいた。

#### 四 引揚げ後の日本

やがて十二月に入ると、大連港からの引揚げが始まるというわさが飛び交い、我が家にやっと順番が廻ってきたのは二月下旬になってからであった。女所帯の叔母一家は私たちより一週間遅れの順番になっていて、先に帰してあげたいのに大変すまないと思ったものである。

引揚げ船出航の二日前に、布団と身の回り品だけを持った我々は、埠頭近くの大連実業学校の校舎に集められ検査などの出国手続きを済ませて、三月十二日引揚げの貨物船(多分信濃丸であったと思う)に乗った。船内では、船長、船員一同から「お帰りなさい、乗船したらもうここは日本です」というあいさつがあり、目の前で日の丸の国旗掲揚と君が代が流された。久しぶりにみんなで君が代を歌い、やっと日本に帰れるという実感が沸き、ほっとしながら乾麺の入ったご飯を噛み締めながら食べた。

もうすぐ日本に着くという前日に、船内で亡くなった人もいた。水葬をするに当たり、多くの人が甲板に上がって、みんなですと手を合わせた。

三泊四日後に、まだ明けやらぬ佐世保沖合いに錨を下ろした。初めて見る日本の緑濃い景色に、思わず息を呑むほどの衝撃を受け感動した。大連の冬景色は、禿げ山の瓦礫に草一本生えていないような殺風景な景色である。それに比べると何と豊かな緑だろうと、見とれるばかりであった。

佐世保・南風崎港に入港し上陸したのは昼近くになってからで、まずDDTを頭から靴の中まで真っ白になるまで噴霧され、元海軍の施設だった屋根のある海水浴場の残敷のような旧兵舎跡に收容された。いくばくかの生活支援金が支給され、出回ったばかりの夏みかんが珍しく、これを買って食べ、日本の第一歩を踏み出した。引揚者集団は、四日後にやっと貨車に分乗させられて、思い思いの故郷へ帰って行った。

我々一家五人は、上陸時の検診で父が肺結核と診断され、国立佐世保病院(旧海軍病院)に收容され、しばらく滞在した。間もなく、福岡の国立筑紫野病院(旧海軍病院)に移り、さらに故郷佐賀の国立嬉野病院(旧海軍病院)に廻された。このことが、後々私の一生に大きな影

を落とす原因になった。

家が無いので病院から中学校に通っていた私は、翌年の昭和二十三年四月に突然高熱を出し、よもやの結核と診断された。それも若いだけに急性で、連日高熱が続ぎ、栄養不足も手伝って回復の見込みがない。私はそれほど意識しなかったが、生死の間をさまよっていたらしく、急を聞いて既に引き揚げていた東京の従姉妹たちからも手厚い見舞いの手紙が届いたり、顔見知りの若い看護婦が突然見舞いに来てくれたりして、自分の病状について、この深刻さをやっと理解するほどであった。当時はストレプトマイシンなどという特效薬もなく、胸膜に空気を送り込んで肺の病巣を圧迫する気胸や、肋骨を数本切り取って病巣を圧縮する胸郭成型術という手術しか無かった。私は急性だったため、胸膜が癒着して気胸ができない。望めるのは、より厳しい胸郭成型術に頼るしかない。絶対安静を守って急性症状を収めるのが目標で、高熱、微熱を繰り返しながら闘病生活を続けた。翌昭和二十四年六月、やっと待望の胸郭成型術が受けられるまでに回復し、六本の肋骨を切除して肺を圧縮し生き延びることができた。



私の横のベッドや前後のベッドで、若い学徒復員兵たちが、喀血を繰り返しながら次から次へと亡くなっていった。このような状況下、私は毎日身の縮む思いで、死を身近に感じながら療養生活を送った。

終戦後の次兄は陸士二年で閉校となり、親兄弟のいない中、故郷・佐賀の親戚を頼って身を寄せ、時計修理などをして生計の足しにしていたそうである。その後、葫蘆島からひと足先に引き揚げて来た叔父を頼って対馬に身を寄せ、向学心を胸に秘めながら、書店や雑貨販売店を経営していた。七月に入ると、シベリアに抑留されていた長兄が復員して来た。それまで、病状が一進一退だった父は兄の顔を見て安心したのか、二週間後に亡くなった。兄は復学のため九月に上京して、叔母宅に厄介になった。父は、私の手術が成功し生き延びたのと引き換えに旅立ったのかもしれない。安静が唯一の私の療養生活は、その後六年間も延々と続いた。

戦後間もないころの療養生活の基本は、病巢の肺を動かさないよう絶対安静をとること、栄養を十分補給すること、きれいな空気を吸うことが三大治療法と言われた。

このような中、中学校の養護教諭が見舞いに来てくれて、食糧不足のこの時期、栄養不足にならないよう食事はひと口三十回は噛んで食へるよう指導してくれた。この指導のお陰でひと口三十回噛むのが習慣となって、いまだに食事を終えるのがだれよりも遅く、いつまでも口を動かしているのが現状である。

病院で絶対安静の生活を送らざるを得なかった中で、私は将来の自活を絶えず考えていた。入院生活の後半になると特效薬が使われるようになり、病巢の肺をそっくり除去する肺切除術が広く実施されるようになった。このような医学の進歩で、若い学徒復員兵の患者は少なくなり、代わりに中学校、高校の教師、私立学校の理事長など学校関係者が多くなった。このような人たちは周囲から人格者と尊敬されており、病室の雰囲気は明るくなった。私は三十歳を少し越えたこのような人たちからよくかわいがられ、多くの感化を受けることができたと思う。

少年期から青年期にかかろうとしていたこの時期、良書に恵まれよく本を読んだ。「若きヴェルテルの悩み」「椿

姫「マノンレスコー」などの恋愛小説に胸をときめかせ、「戦争と平和」「大尉の娘」「罪と罰」などのロシア文学に胸を踊らせ、「フランス革命史」などの歴史書に啓発され、武者小路実篤、倉田百三、夏目漱石、森鷗外、島崎藤村、石川啄木を読んで思考を重ねるなど、読書時間が豊富にとれたことは幸いであった。俳句のグループにも顔を出して、苦吟の真似をしたり、病状を気にし波立つ心を抑えながら、若い看護婦と淡い恋心を交わせたのもこのころである。

回復期に差し掛かり退院する半年くらい前に、主治医から実験用動物の面倒を見てほしいという依頼があった。私は社会復帰を目指して、少しでも役立つことがあればという思いで、ウサギ小屋の掃除をしたり餌用の草刈りをしたり、またハツカネズミの世話をして安静以外の自由時間を費やした。

結局、退院できたのは昭和三十年十一月のことで、二十二歳であった。それまでに長兄は東大を卒業し、昭和二十七年に五年遅れで大手の不動産会社に就職していた。次兄は、対馬で学業復帰の手だてとして経営していた書

店・雑貨販売店を三兄に譲り、長兄の就職を見定めて上京し、苦学しながら大学に通っていた。

退院後は、対馬・比田勝で昭和商事という店を興し、大きな商いをしていた三兄を頼って転地療養のため厄介になった。この昭和商事の前身は、戦後家族から離れて自活しなければならなかった次兄が、学業復帰の準備として始めた書店・雑貨販売店を引き継いだものである。肺浸潤で療養生活を余儀なくされた三兄は国立嬉野病院退院後、医専中退のまま医者志望を諦めて、叔父と次兄の住む空気のきれいな対馬に移り、店を引き継いだ。その後わずか三年で、昭和商事という菓子・食品などを含む雑貨卸小売商を大々的に経営し、昭和丸という船を一隻持って下関、博多に仕入に行き、対馬沿岸に卸しに行くという活躍で、対馬の首都、厳原に次いで大きな比田勝という町の名士になっていた。中学は商業を出ていて算盤は抜群にうまかったが、商才が人並みはずれて長けていたのだと思う。私にとっては、何よりも空気がきれいな所へ転地するのが必須条件だったので、兄が快く迎えてくれたのは大変有り難かった。

対馬での生活は、兄嫁が私の病弱をよく理解してくれて、何かにつけてよく面倒を見てくれた。私は自分の体力と相談しながら、店の掃除をしたり店番をしたりしながら養生させてもらった。ときには、昭和丸が博多に商品仕入れに行くときや、沿岸に卸しに行くときに便乗させてもらって、徐々に体力は回復していった。

## 五 自立への始動

長期入院から解放されたとき、同期の友人たちは既に大学卒業の年であった。当時は残念で悔しいと思ったが、これから生きていく手立てをどうするかが心の大半を占めていたので、悔しがる余裕などなかった。少し風邪をひいただけで再発を心配する状況の中で、身心共にリハビリが必要だ。「健全なる精神は、健全なる身体に宿る！」をモットーに、まず身体に自信を待たなければ、先行きどうにもならない。幸い両親がいない中、兄たちが四人とも健在で、よく面倒を見てくれる環境にあったのが良かった。

まず、身を寄せた対馬で三兄に厄介をかけ、リハビリしながら二年半を過ごし、昭和三十三年三月に東京にいる長兄、大手建設会社に勤めだした次兄を頼って学校に

行きたい希望を伝え、了解をもらって上京した。病弱な身体ではまともな肉体労働はできないし、学歴がなければ会社に入っても下積み生活が閑の山だ、と思って大学を目指した。

大学入学資格検定試験を受験するための準備期間中は、長兄、次兄に下宿費を出してもらい、その他の生活費は自前で稼がなければならぬ。また、受験しても不合格になった場合のことを考えて、まともな職にありつけるようにと、四月から授業料無料の職業訓練所の電子工学科で勉強し、放課後にはアルバイトをした。やはり、このころは身体に自信がなく風邪をひかないよう細心の注意を払い、流行性感冒が流行ると病気の再発が怖かったので、じっと息を潜めて生活していた。

八月に大検を受けて、翌年、安保騒動のさなか、昭和三十五年四月から晴れて理工学部・電子工学科の大学生になった。退院してから四年半経っていた。大学時代の四年間は、入学金と一年分の学費は長兄が負担してくれたが、生活費は自分で稼ぐしかない。アルバイトは職業訓練所で学んだ電子工学を生かして、日本電波の生産管理

課に採用され、働くことができた。ものを作るか、仕入れて売るかの職業しかないと思っていたのが、生産管理という職種があるのをこのとき初めて知った。

忍耐と頑張りが入院生活で身に付け、健康維持は再発防止に気をつけながら身に付けていった。このころは、仕事と大学通学の両立のため、脇目もふらず、朝七時半に下宿を出て、二十三時に帰宅するという生活に明け暮れた。大学が夏休みになると、生産管理・購買担当の職種で必須だった車の免許を取り、休日にはこの車を借り出して、友人たちと息抜きのドライブを楽しむ余裕ができて楽しかった。正月には、兄の所に行っておせち料理をよばれたり、ときには夕食によばれて、料理の得意な兄嫁の家庭料理でご馳走になるのが楽しみであった。この時期、長い療養生活でお世話になった国立嬉野病院で知り合った看護婦が上京していて、東京の国立病院に転勤して来たことを知り、ときどき会うことができて大きな励みになった。

兄、兄嫁、叔母、従姉弟、友人たちに助けられたこの四年間の苦学生生活は、苦労はあったが言葉に尽くせない

多くの人生経験を積むことができた。

振り返ってみると、病院生活はそれほど悪くはなかったと思う。入院中は回りに優秀な人、人格者が多く、良い意味での感化を受けることができたこと、一つは、若さの特権で悩みも大きかったが人生とは何ぞや、の思索時間が豊富にあったこと、古今の良書を読み漁ることができたこと、死に直面したことでものに動じなくなったこと、これは一方、ものに動じて脈拍が高鳴るとすぐ三十八度以上の高熱が出てしまうので、精神安定が必要だったことに由来する。必要に迫られて波立つ心を抑え込んだ結果、ものに動じない心を自然に体得したのである。これは就職してからセンシティブティに欠けることになったが、「何をそんなに急ぐの？ 慌てちゃいかん！」という泰然自若とした風貌に直結して、周囲の人に疎まれるもになった。

当時、私は六十歳まで生きられれば言うことは無いと思った時期があった。それにしても、これからは強い体を持つて独立した生活基盤を築き、初恋で夢見たような美しい女性と人並みに結婚もしたい。母方の従兄からは、「お前は早く母親を亡くしたので性格が偏っている。結婚

相手はきちんとした人で、両親が揃っていなければならぬ」と、くどくどと言われた。

## 六 就職後の生活

就職では、三十歳でも新卒採用してくれるという日本IBMに一九六三年にぎりぎりの年齢で受験し、翌四月、大阪営業所所属のSE職で入社した。これでやっと一人前になれたとの思いが強く、周囲で支えてくれた人たちへの感謝の気持ちでいっぱいであった。

当時は日本の経済は新しい時代の幕開け、高度成長時代の幕開けであった。入社早々の会社では、最初の五週間は研修センターでSE職、営業職合同の座学研修があり、一週間に一度、土曜日半日の午前中はこの週に学んだ科目のテストがあった。それも一〇〇点満点が目標で、八〇点以下では職員室に呼ばれて進路指導を受ける羽目になる。これで配置転換させられた仲間が数人はいいた。

この研修から営業所に帰ると、九月には淀屋橋の住友金属工業・本社に配属された。ここでは販売管理システムや契約コンピュータの設置などで猛烈に働いたが、終わってやっと正常な生活に戻れた。

昭和四十年十一月に、下宿先のお世話でお見合い結婚をして、翌年、長女が生まれた。昭和四五年までにさらに二人生まれて、総勢、五人家族となり、責任も重くなつた。翌昭和四十九年一月には、システム課長に昇進した。

部下を統括するために、過去の長期入院時に患った中耳炎(難聴)を解消しようと思いい、手術をした。しかし、手術をして却って聴力が落ちてしまい、以後苦勞するものになったが、連日使命感に燃えて終夜遅くまで残業をした。

## 七 定年後・第二の人生

平成五年、定年退職の二年前に、JICAシルバー協力隊員に登録してソフトウェアの準備を始め、会社に着席を置きながら定年後も含めて三年間、専門学校で若者の育成に努め、SE教育に携わった。

定年退職後は、足掛け三十年勤めたコンピュータの世界からきっぱり足を洗い、生まれ故郷の大連に行こうと思つて日本語教師の資格を取った。翌年にはJICA下部組織のJSV(日本シルバーボランティアーズ)派遣の技術交流職員として、大連大学・管理幹部学院に職を得て日

本語教師となった。このきっかけを作ってくれたのは、日本IBM時代の先輩の光吉氏である。

このころの中国はまだ貧しく、空港から大学までの道中は明かりがぼつぼつと見える程度で暗かったし、雨が降れば道路は泥んこになるのが常であった。家内が協力してくれたお陰で、環境の悪い中国赴任はおしどりで何とか凌ぐことができた。劣悪な環境が好転ししたのは、平成八年ぐらいからである。日本語教師は一年契約更改なので、三年間に三つの大学で日本語教師を務めたが、政府系の大連市信息中心(DIC)、現・大連華信計算機(DHC)の部長が私の日本語教室に受講に来ていて、これがきっかけとなって社長の出迎えを受け、品質顧問ということまでDHCに就職することになった。それから十年間、現在に至るまで再びコンピュータの世界に首を突っ込むことになった。

中国の成長は平成二年から急速に伸び、IT産業が国家プロジェクトとして脚光を浴び始めた。急速な発展の裏にはいろいろな問題も生じていた。一言で言えば、法治国家とは言えない矛盾したオペレーションが、日常茶飯事の

ようにまかり通る世界でもある。そこで、私は今までのごとくに中国企業の中で一人で頑張っていくことに限界を感じ、ボランティアとして独立した形で、平成十四年八月に大連ITクラブを立ち上げた。

#### 八 最後に

現在の私は大連ITクラブ会長として、大連のIT業界全体の底上げに協力しており、二カ月に一度の例会に参加して会を主宰している。その他、大連コンピュータコンサルティング・代表として、オフショア開発の先頭に立って、日本のお客様と中国のベンダーとの橋渡しをしながら、まだに現役で働いている。

私は、病弱ながら一九六〇年代後半からの日本の高度成長期を日本IBMで経験し、一九九〇年代後半から現在に至る中国の高度成長期は定年後のボランティアとして、二つの成長局面に凶らずも直面したことになる。

祖父、祖母と母が幼少のころに大連で亡くなり、金州で生まれて、旅順で終戦を迎えた。十四歳で引き揚げたときからの思いは、祖先の霊が眠る我が故郷・大連に里帰りして日中間の架け橋として役立ちたいという希望があ

り、これが叶えられていることを幸せに思う。平成十年夏には、現地で生まれた兄弟五人が健全なうちにと相集い、大連、金州、旅順を訪問した。日露戦争終結の明治三十八（一九〇五）年から終戦までのわずか四十年間に、我が親族は、大正、昭和にかけて現地で活躍し、お世話になったのである。そして大連の旧家を訪問し、現地で亡くなった祖父母、母親の霊を慰めることができた。

私は「六十歳まで生きればよい！」と思っていた時期があつたが、今や七十五歳を数えるまでになった。これからも多くの人と関わりを持ちながら、豊かな余生を生きたいければ有り難いと思う。

